

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### 翻訳批評

山岡洋一

#### - 訳注という厄介物

翻訳書でよく見かける割注や訳注は、ほとんどが不要かそうでなければ役立たずであり、読書の妨げになるだけで、何の益もない。訳注などはやめにして、はじめから意味が通じる訳文を書いてほしいというのは、無理な注文なのだろうか。

### 誰も教えてくれなかった英語 (第1回)

柴田耕太郎

#### - 並列のand

何かもやもやとするのに学校では教わらない、いわば英語を読むコツを開陳する。第1回は並列のand。簡単なようだが、誤訳の原因のうちいちばん多いのが並列の読み違えだ。

### 辞書評論

山岡洋一

#### - 学習辞典に新機軸 - 『Eゲイト英和辞典』と『ウィズダム英和辞典』

#### - 類語辞典の決定版 - 『類語大辞典』

翻訳を職業にしている関係で、新しい辞書がでると、かなりの比率で買う。たぶん、辞書を買う人は多いだろうから、自分が買った辞書について感想を伝えれば、役立つこともあるだろう。最近入手した新しい辞書を紹介しよう。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 訳注という厄介物

山岡洋一

昔の翻訳書を読むと、割注と呼ばれる訳注が文中に挿入されていることが多い。1行を2つに割って小さな字で注釈をつけるから割注という。たとえば「セントラル・パーク」に「ニューヨーク市マンハッタン島の中央にある有名な公園」といった注がついていたりする。たいていはあらずもがなの蘊蓄であり、たまに知らない言葉や事柄がでてくると、多くて数十字の割注を読んでもさっぱり分からないということになる。

最近は割注の小さな字が嫌われるようで、訳注として巻末や段落の末につける方法をとるのが通常になっている。このため、字数の制約がなくなったわけだが、それでも性格が変わるわけではない。たいていは不要かそうでなければ役立つであり、読書の妨げになるだけで、何の益もない。割注にしる訳注にしる、ないのがいちばんだと思う。

またまた『国富論』かと思われるかもしれないが、水田洋監訳・杉山忠平訳の『国富論』（岩波文庫）から、厄介な訳注の例をあげてみよう。

この訳書は2000年5月に第1編の第1刷が刊行された。「凡例」によると、訳者が前年に死去したため、水田洋が監訳者として訳稿の点検や訳注の作成を行ったという。奇妙なことだが、わずか2年後の2002年4月には全面的に改訂した第2刷が刊行されている。以下では第2刷を使っている。何十年も前に刊行されたものではなく、21世紀に入ってから新訳として刊行されたものであることを指摘しておきたい。

### 『誤訳』のトラウマ

水田・杉山訳の第1編第5章に以下のような訳文と訳注がある。

.....銅貨は現在でも、少額の銀貨にたいするつり銭のばあい以外は(1)、法貨ではない。.....

(1) 銀貨の金額にたっしないかぎりの銅貨は、法貨であるということ。(79ページ)

じつに奇妙ではないだろうか。「少額の銀貨にたいするつり銭」という訳文が正しければ、「銀貨の金額にたっしないかぎりの銅貨」という訳注は間違いだし、訳注が正しければ、訳文は間違っているのだから。

なんとも分かりにくいと思われるかもしれないが、銀貨を紙幣(1000円札)に置き換え、銅貨を硬貨(500円硬貨、100円硬貨など)に置き換えると、なんのことはないと思えるはずだ。もうひとつ、「法貨」の意味を確認しておこう。これは「強制通用力を法律上与えられている通貨」(『有斐閣法律用語辞典』)であり、要するに、それで支払う人がいたとき、支払いを受ける側が拒否できないお金である。逆の場合、つまり「法貨ではない」のがどういうときかを考えてみる方が分かりやすいだろう。たとえば、1万円の商品を売ったとき、1円玉で支払われたのでは面倒でかなわないと思うのは当然だ。だから、商店の側は紙幣で払ってくださいという権利が法律上認められている。正確には、硬貨が法貨として通用するのは「額面の二十倍まで」である(『有斐閣法律用語辞典』)。

以上を前提に訳文と訳注の意味を考えると、こうなる。訳文に従うなら、たとえば400円の買い物をするとき、1000円札で払うと、500円玉1個と100円玉1個の釣銭をだされる。これは法貨だから、客は拒否できない。ところがある。400円の買い物に100円玉を4個だと、店の側は拒否できる。なぜなら、硬貨は「紙幣にたいするつり銭のばあい以外は、法貨ではない」からだ。これが訳文の意味だ。

ところが、訳注には違うことが書いてある。「紙幣の金額にたっしないかぎりの硬貨は、法貨である」。紙幣がある1000円に達しないかぎり、つまり999円までの支払いには、硬貨が使える。400円のものを買うときは100円玉を4個だせばいい。これが訳注の意味だ。

こう考えると、訳文の「少額の銀貨にたいするつり銭」が間違いであることはまず確かだと思える。釣銭として使えるが、支払いに使えないのでは通貨にならない。だから、はじめから訳注のように訳するのが正解のはずなのだ。ところが水田洋はそうはできなかった。そうはできなかったが、いくらなんでもこの訳文ではおかしいことに気づいていた。だから、訳注で補足する方法をとったのだろう。そう考えなければ、訳文と訳注の矛盾を説明できない。

問題はなぜ、はじめから訳注のように訳せなかったのかだ。その理由はかなりはっきりしている。水田洋

は原著初版の抜粋訳について、竹内謙二の『誤訳 - 大学教授の頭の程』（有紀書房、1964年）でこの部分を誤訳だと指摘された。さらに、原著初版の全訳を刊行した後、別宮貞徳の「欠陥翻訳時評」で同じ部分を取り上げられて論争になった（別宮貞徳著『翻訳と批評』講談社学術文庫を参照）。竹内の『誤訳』によれば、ここで原文にある change を「釣銭」と訳したのは水田洋だけである。このような経緯があるので、ここで「釣銭」以外の訳語を使えば誤りを認めることになる。だから「釣銭」にし、訳注をつけた。これがおそらく、はじめから訳注のように訳せなかった理由なのだろう。

それにしても馬鹿げていないだろうか。訳注のように解釈するのであれば、「銅貨は現在でも、少額の銀貨に満たない小銭のばあい以外は、法貨ではない」とすればいい。「小銭」という訳語はたいていの辞書の change の項にある。それに竹内謙二は「両替」という訳語をあてており、「釣銭」と変わらぬほど奇妙だと思えるので、「小銭」なら竹内に屈伏したことにはならない。なぜ、「釣銭」にこだわるのだろうか。

それはともかく、ごく普通に考えれば、訳文で間違った（少なくとも不適切な）言葉を使い、訳注で意味を説明するというのは、何とも不親切な方法ではないだろうか。訳注などはやめにして、はじめから意味が通じる訳文を書いてほしいというのは、無理な注文なのだろうか。

### 蘊蓄を傾けるのなら.....

第1編第8章にはもっと奇妙な訳注がある。139ページの訳文に「チャールズ二世の時代に本を書いた高等法院長ヘイルズは(3)」とあり、141ページの訳注にこう書かれている。

(3) ヘイルズはヘイル(Matthew Hale, 1609-76)の誤記。ヘイルは革命期からチャールズ二世時代にかけての裁判官で、スミスが言及しているのは、Discourse touching provision for the poor, London, 1683である。

ここには奇妙な点がふたつある。第1に、イギリスの高等法院は19世紀に設立されたものなので、時代があわない。原文にある Chief Justice は当時、Chief Justice of the King's Bench（王座裁判所首席裁判官）であった。

第2はもっと深刻な問題だ。ヘイルは有名な法律家だし、原文にある Hales が誤植であることははるか昔から指摘されてきたことなので、ここであらためて指

摘する意味はない。誤植だと分かっているのだから、訳文では「ヘイル」か「ヘール」と表記するのが当然ではないだろうか。ところが水田洋は本文に「ヘイルズ」と書いて、訳注で間違いを指摘する方法をとった。

自分が原著者だと想定して、どう思うかを考えてみると、怒るか不快になるか、赤面して原文の訂正をお願いするかは分からないが、水田・杉山訳の方法だけはとらないよう求めるはずである。つぎに読者としてこの部分を読んでどう思うかということ、まったく不要な訳注だと感じる。本文が正しく書かれていればいい。どうしても訳注が必要だというのなら、訳文は「ヘイル」にして、訳注には「原文にある Hales は誤植であり、正しくは Hale」と書いてほしかった。

だが、なぜこのような訳注が必要なのだろう。思いつくのは2つの点である。ひとつは、蘊蓄を傾けたいという欲求が訳者にあったというものだ。そうかもしれないし、そうではないのかもしれない。

もうひとつは、読者が原著を読むものと想定しているというものだ。読者は原著を正面において読むはずであり、訳書を横において参考にしてはいるはずだと想定しているのだ。その場合でも、上述のように訳文では「ヘイル」にして、訳注で誤植を指摘するのがせいぜいだとは思いますが、それ以上に重要な点として、そのような読者はいるはずがないと指摘しておきたい。研究者なら、訳書なぞに頼らず、原著を読むべきだし、研究者以外の読者なら原著か訳書かどちらか一方しか読まないはずである。翻訳は訳書だけで読もうとする読者のために行うべきだ。そうした読者にとって、この訳注はまったく余分だとしかいえないはずだ。

### 訳注は不要

以前に指摘したことがあるが、たぶん最悪の訳注は、原文の洒落や地口を解説するものだろう。小説の学者訳にはこのような訳注があることが少なくない。それこそ洒落にならないやり方であり、それを読んだだけで白けて本を放り投げたくなる。お勉強でも研究でもなく、楽しみのために読んでいるのだから。

『国富論』の訳注はそこまで極端ではない。だが、読書の途中に余分な注釈を読まされるのはかなわない。無視すればいいのだが、それ以前に訳注が不要になるように訳してほしいと思う。

## 並列の and

柴田耕太郎

何かもやもやとするのに学校では教わらない、いわば英語を読むコツを開陳する。この半分は私自身が仕事をしてゆくうちに会得したもの、半分は各種英語教習本から直接、またはヒントを得て理解したものである。特に次の3冊、伊藤和夫著『英文解釈教室』（研究社）村上陽介著『英語正読マニュアル』（研究社）中原道喜著『誤訳の構造』（吾妻書房、絶版）にはお世話になり、考え方や文例を適宜拝借している。主たる文例は私がいままでに読んできた評論・小説より選んだ。

### 並列の and の規則はたったこれだけ

- (1) ) 同一の品詞、 )同一の形、 )同一の機能、のものを並列で結ぶ
- (2) 1, 2, 3, -, and N の形が原則 (N は任意の数)  
\* イギリス英語では 1, 2, 3, - and N となる
- (3) ) リズム重視の場合は and を省く  
 ) 強調の場合は 1 and 2 and 3 の形をとる

#### 1、上記の規則の基本例を示す

- (1) ) She is sincere and honest.  
(品詞：形容詞の並列)  
 ) Walking and swimming are good exercise.  
または  
To walk and to swim are good exercise.  
(形：動名詞、不定詞と形をそろえる)  
 ) She had bright and mischievous eyes.  
(機能：性質・形状を示す形容詞の並列)
- (2) Man saw the sun, the moon, and the stars revolve round the earth.
- (3) ) We are a nation of flower-lovers, but also a nation of stamp-collectors, pigeon-fanciers, amateur carpenters, coupon-snippers, darts-players, crossword-puzzle fans.  
 ) But what about potatoes and cabbages and carrots and onions?

簡単でしょ。でも、いろいろな変形があって難しくなる。

#### 2、変形の代表例をいくつか

- (1) 間に修飾語が入る

- She is beautiful, clever, and what is the best of all, rich.  
(彼女は綺麗で頭が切れて、何よりもお金がある)  
\* what is the best は rich を修飾する

#### (2) 文と文が等位で結ばれる

- The mass of the people are without military knowledge or tradition, and their attitude towards war is invariably defensive.  
(大方の庶民は軍隊の知識もなくしきたりも知らず、戦争への態度は決まって消極的なのである)  
\* 日本語で重文というもの

#### (3) 並列がやたらに長い

- In Mexico, in 1953, a group of enlightened physicians began prescribing minute doses of royal jelly for such things as cerebral neurities, arthrities, diabetes, autointoxication from tobacco, impotence in men, asthma, croup, and gout.  
(1953年、メキシコで、進歩的な医者グループが脳神経症、関節炎、糖尿病、タバコによる自家中毒、男性の勃起不全、喘息、偽膜性喉頭炎、通風などの病に微量のローヤルゼリーの投与をはじめた)  
\* cerebral neurities 以下、八つが列挙されている

#### (4) 二組の対語が and なしに並列される

- Again it came—a throatless, inhuman shriek, sharp and short, very clear and cold.  
(また聞こえた。人の声とは思えぬ叫びが、瞬時鋭く、寒々しく澄んで)  
\* sharp and short, clear and cold それぞれ、音を揃えてあり一語扱い

#### (5) 並列される品詞が見分けにくい

- The other guests gathered around the pool laughed and clapped.  
(プールの周りに集った他の客たちは、笑って拍手した)  
\* gathered は過去分詞形の形容詞。laugh と clap は過去形の並列
- He wears a knitted cap with a green pompom well down over his ears and level with his eyebrows.  
(彼は緑の房のついたニット帽を、耳はすっぽり隠れ眉の線が出るようにかぶっていた)  
\* well down over と level with が並列し、wears に掛かる。down は副詞(降りて)、over は前置詞(...を覆って)。

level with ~ は副詞句(～と水平に)

\* well down over と level with を a green pompom に掛かる形容詞句ととるのは、意味(そんな房飾りがあるか?) からいって無理。

• Hofstadter's American democracy, in contrast, was built on the plurality of interests, religious and economic.

(それに対し、ホフスタッターのいうアメリカ流民主主義とは、宗教と経済の利害の絡み合いのうえに打ち立てられるものであった)

\* interests は名詞、religious と economic が形容詞で並列し interests に掛かる

• Usually he had his waistcoat pockets full of little nicknacks, rings, cigarette lighters, watches, and such.

(彼はいつもベストのポケットに装身小物をいれている。指輪、ライター、時計なんかを)

\* nicknacks は、ring 以下並列列挙されているものの上位概念

• Klausner walked quickly through the front gate and around the side of the house and into the garden at the back.

(クラウスナーは足早に門から家のわきを抜け裏の庭に出た)

\* 前置詞 through, around, into の並列

• There are vast mountain and highland areas in the north and fertile plains in the south.

(北には広大な山岳・高原地帯があり、南には肥沃な平原がある)

\* 前の and は、形容詞として働く mountain, highland を並列(areas に掛かる)。後の and は名詞 areas と plains を並列

と大まかな注意点を知ったうえで、小説よりの実例で力だめしを。

### 3、演習

(1) How I longed to do likewise—to be able to share in a few of those pleasant little rituals of contact that I observed continually taking place between men and women—the touching of hands, the peck on the cheek, the linking of arms, the pressure of knee against knee or foot against foot under the dining-table, and most of all, the full-blown violent embrace that comes when two of them join together on the floor—for a dance.

(2) He moved on glancing without any interest at the things in the shop windows—perfume, silk ties and shirts, diamonds, porcelain, antique furniture, finely bound books.

(3) The elaborate garden houses, the pools, the fountains, the children's maze whose hedges were hornbeam and lime so that it was only good in summer when the leaves were out, and the parterres, the rockeries, the greenhouses with their vines and nectarine trees.

(4) As he listened, he became conscious of curious sensation, a feeling that his ears were stretching out away from his head, that each ear was connected to his head by a thin stiff wire, like a tentacle, and that the wires were lengthening, that the ears were going up and up towards a secret and forbidden territory, a dangerous ultrasonic region where ears had never been before and had no right to be.

(5) The room was full of people now, all sitting at little tables, talking and drinking and wearing their uniforms.

(6) For the rest there were gondolas (with the lady trailing her hand in the water), clouds, sky, and chiaroscuro in plenty.

### 構文分析:

( ) { } [ ] は読むうえでの便宜的な大きなかたまり。 / は文の切れ目。 < > は説明箇所

(1) How I longed to 1<do likewise>[2<---->to be able to share in a few of those pleasant little rituals of contact (that I observed continually taking place between men and women) ] [ 3<---->the touching of hands, the peck on the cheek, the linking of arms, the pressure of knee against knee or foot against foot under the dining-table, and (most of all,) the full-blown violent embrace {that comes (when two of them join together on the floor)} {4<---->for a dance} ] .

1 「同じようにする」だが、以下で同じようとはどういうことかを説明している

2 このダッシュは do likewise の言換え

3 このダッシュは更に do likewise の具体例を示す

4 これは付言のダッシュで、embrace に掛かる

\* the touching ~ on the floor までは 1, 2, 3, 4, and 5 の形

あんな風になればとどれだけ望んだことか。よく目にする、男と女のあいだで交わされるささやかだが喜びに満ちたふれあいの儀式がちょっとでもできたら。手に触れたり、頬にキスをしたり、腕を組んだり、ダイニングテーブルの下で膝や足をそっと押しつけあったり。なによりもやってみたいのは、ダンス・フロアーで組んだ二人がする、あの甘美で激しい抱擁だ。

(2) He moved on glancing without any interest at the things in the shop windows1<----perfume, silk ties and shirts, diamonds, porcelain, antique furniture, finely bound books>.

- 1 ダッシュのあと、1, 2, 3, 4, 5, 6.の形で名詞が並列。silk ties and shirts は一語扱い。silk は形容詞的に ties と shirts に均等に掛かる(でなければ shirts で並列は終わってしまう)

彼は歩をすすめ見るともなしにショーウィンドーに目をやった。香水、絹のシャツとネクタイ、ダイヤモンド、陶磁器、骨董品、豪華な装丁の本。

- (3) The elaborate garden houses, the pools, the fountains, the children's maze [whose hedges were hornbeam and lime {1<so that> 2<it> was 3<only good in summer> (when the leaves were 4<out>)}] ,and the parterres, the rockeries, the greenhouses (with their vines and nectarine trees).

- 1 「...するように」  
 2 the children's maze  
 3 only は good を強調する「夏にこそ役立つ」  
 4 「(芽や葉が)出る」  
 \* 1, 2, 3, 4 and 5, 6, 7. の形。(1, 2, 3, 4) and (5, 6, 7) ととるか、, , , and (5, 6, 7) ととるか。が重すぎてバランス悪いので、後者の解釈は無理だろう。

凝った四阿と小池に噴水、葉の茂る夏にこそ価値がわかるシデとライムでできた子供用迷路、さらに幾何学模様を花で織りなすパルテール、高山植物のあるロックガーデン、スモモとブドウのビニールハウス。

- (4) As he listened, he became conscious of a curious sensation./ 0<a feeling> {1<that> his ears were stretching out away from his head, 2<that> each ear was connected to his head by a thin stiff wire, like a tentacle, and 3<that> the wires were lengthening, 4<that> the ears were going up 5<and> up towards a secret 6<and> forbidden territory, /7<a dangerous ultrasonic region> (where ears had been before 8<and> had no right to be)}.

0 英語は同じことばのくり返しを嫌う。a curious sensation の言換え

- 1~4 いずれも that は同格名詞節を導く接続詞。  
 可能性 ) (1, 2,) and (3, 4).  
 可能性 ) 1, 2, and 3, /4.  
 だが、これは意味が自然に通るほうを採るしかない。  
 ) の場合：「耳が頭からグングン離れていった+耳は触覚のような細く硬いワイアーで頭とつながっていた」また「ワイアーは伸びていった+耳は秘密の禁じられた領域のほうへどんどん近づいていった」

) の場合：「耳が頭からグングン離れていった+耳は触覚のような細く硬いワイアーで頭とつながっていた+ワイアーは伸びていった」つまり「耳は秘密の禁じられた領域のほうへどんどん近づいていった」  
 どちらが説得性あるでしょう。私は ) をとりませんが、他の読み方あれば教えてください。

- 5 up and up と同じ言葉(ここでは副詞：上に)を重ね、頻度・程度を上げている  
 6 形容詞 secret と forbidden を並列。ともに名詞 territory に掛かる  
 7 a secret and forbidden territory を言い換え  
 8 had never been before と had no right to be を並列

聴いていると奇妙な感覚に襲われた。耳が頭からグングン離れて、極細のピアノ線でかろうじて繋がっているような感じだ。ピアノ線は触覚のようにどんどん伸びてゆき、耳は禁断の領域である危険に満ちた超音波の帯域にまで達するかのようだ。

- (5) The room was full of people now, 1<all sitting at little tables, talking and drinking and wearing their uniforms>

- 1 1/ 2 and 3 and 4 と読みたい(カンマ以下 all sitting の付帯状況が3つ並列)。  
 感じ方で、1, 2, and 3 とも読めそう(1 = sitting at table / 2 = talking and drinking / 3 = wearing their uniforms)。訳ではほとんど差が出ないし、悩むほど大事な箇所でもない。

部屋は人で一杯だった。みんな小卓につき、制服に身をつつみお喋りしながら飲んでいた

- (6) For the rest there were 1<gondolas (with the lady trailing her hand in the water), clouds, sky, and chiaroscuro in plenty>

- 1 1, 2, 3, and 4 の形で並列だが、4番目は本当は並列できない(1, 2, 3 が視覚化できるのに対し、4 はできないから)。こういう破格または悪文がたまにあって困る。  
 \* 仕方ないから4は並列でない形に工夫して訳す

- (副詞的に)  
 ほかに、明と暗のくっきりしたタッチでゴンドラ(水に手を浸す婦人がいる)、雲、空が描きこまれていた。  
 (独立文に)  
 そのほかは、行き交うゴンドラ(指先を水にひたす女性が描きこまれている)と空と雲。光りと影が明暗を際立たせていた。

## 学習辞典に新機軸 - 『Eゲイト英和辞典』と『ウィズダム英和辞典』 山岡洋一

毎年、この時期には新しい辞書が登場する。もちろん、新入生の市場を狙っているからだ。翻訳を職業にしている関係で、新しい辞書がでると、少なくとも検討はしてみる。そしてかなりの比率で買う。たぶん、辞書を買う人は多いだろうから、自分が買った辞書について感想を伝えれば、役立つこともあるだろう。最近入手した新しい辞書を紹介しよう。

### 『Eゲイト英和辞典』 - 基本的語義に注目

最近買ったなかで、いちばん面白いと思ったのはベネッセコーポレーションの『Eゲイト英和辞典』だ。2000ページほどの学習辞典で、高校生向けなのだろう。だから、そもそも翻訳に使えるようにはできていない。実務にも適しているとは思わない。だが、いくつか面白い新機軸がある。英和辞典の将来の方向を示しているとも思える。

新機軸のなかでとくに目立つのは、「コア」という部分だ。重要な語には発音記号の後に、「コア」がおかれている。凡例によれば、「その単語の中核的な意味や機能を表したもの」であり、要するに基本的な語義である。いくつかの単語ではコアのイメージをイラストで示している。

イラストをここに示すわけにはいかないのですが、興味をもたれた方には、近くの書店で立ち読みし、まず on の項を見てみるよう勧める。「...に接触して」とあり、上、下、横に物が接触しているイラストがある。これなら on の意味が分かると思えるはずだ。

もうひとつ、next の項を見るようすすめたい。イラストで、next week と the next week の違いを見事に説明している。以前にくわしく分析したが、the next week [month, year]、the last week [month, year]の意味を矛盾なく正しく説明した英和辞典はほとんどない。『Eゲイト英和辞典』は正しく説明し、しかもイラスト入りで誤解のない形で示している。

もちろん、語の基本的な語義をイラストで示す方法は、この辞書がまったくはじめてというわけでない。たとえば、政村秀實著『図解英語基本語義辞典』（桐原書店、1989年）はまさにそういう辞書だ。しかし、本格的な英和辞典にこの方法が使われた例は、他に知らない。そして、前置詞や動詞を中心に、この方法が

すぐれていることは、たぶん、いくつかの例を見ると一目瞭然だろう。今後の英和辞典はおそらく、基本的語義を示し、必要に応じてイラストを使う方法をとるようになるだろう。

要するに、『Eゲイト英和辞典』は英和辞典のあるべき方向に一歩踏み出したものだと思う。ただし、一歩だけであることも記しておかなければならない。前述のように、この辞書が翻訳に使えるとは思わないし、実務にも使えるとは思わない。

なぜそう思わないのか、理由はいくつかある。最大の理由は、「コア」に記された基本的な語義が簡略化されすぎていることだ。たとえば record の「コア」には「記録」としか書かれていない。基本的な語義に意味があるとすれば、英語の語の意味をイメージとしてとらえられるようにするときだけだろう。日本語の語に置き換えるだけなら、豆単か出る単で十分だ。

もうひとつ、おそらく編纂や執筆に苦労された方に失礼にあたるかもしれないが、紙面が乱雑でみにくい点をあげておきたい。二色刷りにしたこと、重要語については見出し語に大きな活字を使ったこと、上下左右の空白を減らしたことなど、良かれと思って採用した方針が裏目に出たのだろう。紙面が美しくないというのは、本でも辞書でも致命的な欠陥だと思う。

### 『ウィズダム英和辞典』 - コーパスを活かせるか

もうひとつ、三省堂の『ウィズダム英和辞典』も学習辞書なのだろうが、やはり新しい点があり、英和辞典の将来の方向を示していると思える。

この辞書の新しい点は、コーパス言語学の方法を編纂段階から使ったと主張していることである。ここ数年、コーパスという言葉は新しい英和辞典の宣伝に決まり文句のように使われるようになったが、たぶん、編纂の方法まで変えたと主張したのは、この辞書がはじめてだろう。

コーパスとは要するに、全文データベースだと思えばいい。辞書を編纂するときはまず膨大な文書から用例を収集し、それに基づいて語義を書いていくのが常識だ。以前は、用例をカードに書いて蓄積した。コンピューター技術が進んだので、カードを書く代わりに、

大量の文書や会話の記録などの全文をコンピューターに入力して検索する方法がとれるようになった。このデータベースがコーパスであり、それを利用した言語研究がコーパス言語学だと考えておけば、当たらずといえども遠からずといえるだろう。

カードで用例を収集するのは大変な労力がかかる。コンピューターを使えばもっと早く、低コストで用例収集ができるはずだと思える。だが、実際には問題はそこからだ。資料がいくらあっても、分析し執筆するのは人間だ。分析が甘ければ、コーパスは何の役にも立たない。もっとも、宣伝文句になるので、出版社にとってはありがたいかもしれないが。

コーパス言語学の方法を編纂段階から採用した結果、これまでと違う辞書ができあがったのだろうか。その点は、何とも言いがたい。新しい方法を採用したからといって、成果がすぐにでてくるとはかぎらない。おそらく、今後何回か改訂をくわえ、別の目的の辞書（たとえば大辞典など）の編纂にも同じ方法を使っていけば、いずれ、これまでのものとは大きく違う辞書ができるだろう。

そのような意味で、『ウィズダム英和辞典』は将来が楽しみな辞書だといえるかもしれない。だが、それまでの間、データベースを公開し、利用方法を教える方が有益だし、簡単なのではないかとも思う。

---

## 辞書評論

---

### 類語辞典の決定版 - 『類語大辞典』

山岡洋一

英語の場合は、シソーラスが発達しているが、日本の類語辞典はおどろくほど数が少なく、貧弱でもある。ところが翻訳という仕事の性格上、類語辞典はかなり頻繁に使う。手の届く範囲に4種類を置いてあり、国語辞典と変わらぬほどよく使う。だが、役立っているとは言いがたい。ひいてみて失望する頻度がもっとも高いのが類語辞典だといえるほどである。

そういうわけで、昨年後半に講談社の『類語大辞典』がでたとき、大きな期待をもってすぐ買った。なにしろ、はじめての「大辞典」なのだから。しばらく使ってみて気づいた点をいくつか記しておこう。

まず、ほかの類語辞典をほとんど使わなくなった。何度もひいてみて、これがいちばんだという印象を受けたからだ。語数が多いことが最大の利点だ。だが、失望する頻度はわずかに下がった程度だと思う。要するに、どれもあまり役立たないなかで、いちばんましな類語辞典だという印象なのだ。

なぜ役立つ頻度が低いのか。最大の理由は分類型であることではないかと思う。日本語を99のカテゴリ、1450の小分類に分けて、それぞれに入る語を品詞などで分類して並べてある。

たとえば分類番号3701「戦う」には、分類aの「動詞の類」から分類xの「名詞の類：トキ」まで26に分けて、9ページにわたって語が並んでいる。分類s「名詞の類：ヒト」の45に「水兵」がある。その

前後をみると「陸兵 - 輜重兵 - 水兵 - 海兵 - 騎兵」だ。たしかに、「水兵」の類語が並んでいるが、「役割・所属などからみた兵」という見出し通りの観点からの類語にすぎない。「兵」を共通項にする類語しかないのだ。「水」や「海」を共通項にする同義語、たとえば「船乗り」はない。「船乗り」は6313「乗る」の分類s「名詞の類：ヒト」のうち「船に乗る人」のなかにあるが、そこには「船方」や「水夫」はあるが、「水兵」はない。

このように、分類型の類語辞典には、使い手が考えているとおりの共通項で類語が並んでいるとはかぎらないという問題がある。だから、非分類型の類語辞典、つまり、国語辞典の各項目にそれぞれ類語や同義語、反対語、関連する諺や決まり文句などを並べたものも同時に必要なのだと思う。その点で面白いのは『類語の辞典』（講談社学術文庫）だが、これは明治42年初版というので、収録されている語がほとんど使えないという難点がある。

講談社の『類語大辞典』は現段階ではこれしかないといえるほどの決定版である。だが、なかなか思うように役立ってはくれない辞書なのだ。もうひとつ、決定版がでてほしいと願っている。